

Ann. Rep. Asahikawa
Med. Coll.
1988. Vol.9, 29 ~ 52

懷疑論と知の営みの根拠

岡 田 雅 勝

1. 懷疑論の論証とそれに前提されるもの

懷疑論と知の営みの根拠—はじめに 私たちの知る営みの根拠を一体何処に求めるべきであろうか。「人はしばしば言葉の魔術にかけられる。例えば、〈知る〉という言葉の魔術にかけられる」(『確実性の問題』, パラグラフナンバー435, 以下ナンバーのみを表示)。古来, 哲学は〈知の知〉の探究とされており, 哲学的活動は, まさしく私たちのさまざまな知の営みの根拠への問いにあるとされてきている。そのために, さまざまな方法が模索されてきた。近代の哲学において, 例えば, ベーコンは人間につきまとい勝ちなさまざまなイドラを枚举し, 可能な限りイドラの排除し, 私たちが持ち得ることのできる真知の何かを求めた。またデカルトは, いわゆる方法的懷疑として知られる徹底的な懷疑をとおして揺ぎない確固不易の真理の探究を目差した。彼らは, 近代哲学においてそれぞれ経験主義, 理性主義の哲学の展開への方向づけを与えたのであった。近代の哲学は, 経験主義の哲学であれ理性主義の哲学であれ, 確実な知識の何かを主題としたのであったが, そのさいに知識への懷疑を回避することはなかったのであった。それどころか, 近代哲学の認識論の展開には徹底的な知の懷疑の遂行が前提とされていたのであって, まさに知の懷疑が認識論的体系の基礎とされたのであった。エヤーは哲学(認識論)とは懷疑論を練習することである(『哲学の中心問題』)と述べているが, 知の営みを根拠より論じようとすれば, そこには懷疑論の問題がつきまとうことであろうし, 懷疑論の議論は不可避であろう。

しかしここでは, 近代の哲学が展開したさまざまな懷疑論の議論を挙げ, その論証の在り方を吟味するという方法はとらない。ここでの関心は, まず第一に懷疑論が論証する手続きにおいて, 言語ゲームの観点からして重大な見落としがあるということ, したがって懷疑論の論証は無意味であることを論ずることにある。さらには私たちの知識の営みには, 懷疑されないものが前提とされていて, そうした前提なしには私たちの知の営みが成り立

ち得ないことを論じることにある。そのために疑い得ないとされている命題の吟味と〈私は知っている〉という言葉の用法の吟味が必要となろう。したがってつぎの私たちの関心は、こうした命題の文法的展望に向けることにある。そしてこうした論述のすべてをウィトゲンシュタインの『確実性の問題』にみられる問題に限定することにしたい。

こうした議論の展開にさいして、まずもって主張しておきたいことは、徹底的な懷疑論の展開に対しての疑義の表明であり、私たちの知の営みを全面的な懷疑へともたらすことは、論理的に不可能であり、どの疑いにも疑い得ないものが前提されているということ、つまり、疑い得ない何か（確実性）が前提されるということである。この疑い得ない何かを根拠として私たちの知の営みがなされているのであって、この疑い得ないものをも懷疑に臥すことはナンセンスと言わなければならないであろう。しかし徹底的な懷疑論者は、〈あること〉を懷疑することが思弁可能である限り、それが懷疑の対象となると主張している。しかし懷疑が考えることができると言うだけで、懷疑がなされるとすれば、私たちにとって知の営みの根拠になるものは何もなくなってしまうであろう。例えば、自分の身体についての存在を疑うことが考えられるということで、身体が存在そのものを懷疑してしまうとすれば、それはまったくのナンセンスと言わなければならないであろう。

何かが疑い得ないものとして、確実なものとして懷疑のゲームの基礎になければならない。こうした知の営みの基礎になるものを確実性と呼ぼう。この確実性は、私たちが言語の存在として、言語ゲームを営んでいるという事実に基づけられているということである。どんな徹底的な懷疑であっても私たちは言語的表現をとおした懷疑の行為であって、したがって、ここでこの懷疑の遂行には言語ゲームの習得が前提とされているということをも主張したい。言語ゲームの外に立った懷疑はまったくナンセンスと言わなければならない。懷疑するためには、どうしても懷疑され得ない何かが前提されていなければならない。〈あるもの〉を疑うということ、それには懷疑の言語ゲームというものが前提とされているし、あるものを疑うということは、〈あるもの〉を〈あるもの〉として同定している言葉の意味ないし言葉の用法についての疑いが排除されているのでなければならないであろう。私たちは懷疑の行為にあって、確かに個々のものを疑うことはできるが、しかし全面的に懷疑に臥すことは論理的に不可能であろう。その意味で、徹底的な懷疑論者であっても、言語ゲームの何かについての重大な見落としがあるのである。この見落としをデカルトの取った懷疑に向けて問題としたい。ただし、これもウィトゲンシュタインの論議範囲に限定したい。そして彼が「〈知る〉という言葉の魔術にかけられる」と述べている、その呪力から放たれる努力をしてみたい。

デカルトの懷疑の方法 デカルトは懷疑に先立って、私たちにとって真であり、まったく疑い得ないものを挙げている。一つは私たちの感覚与件である。デカルトに従えばつぎの

ことである。「例えば、いま私がここにいること、暖炉のそばに座っていること、冬服を着ていること、紙切れを手をしていること、その他これに類することがそうである。実際にこの手や身体が私のものであることが、どうして否定できようか」(『省察』1)。「また、眼、頭、手、その他これに類する一般的なものが、たとえ空想的であるにしても少なくとももある他のなお一層単純でしかも普遍的なものは、つまり私たちの思惟のうちにあるものの一切の像が作られものが、真であることは必然的に承認しなければならない。この類に属するものは、物体的本性一般、およびその延長、さらに延長あるものの形態、さらにその量、すなわちその大きさと数、さらにそれがそのうちに存する場所およびその間に存続する時間、その他のものである」(同)。しかしこのように私たちにとって確固として確実であるようにおもわれる事柄も、それは実はすべて夢のなかの出来事として疑うことができる。

内外の感覚もあるいは夢ではないかと疑ってみることができる。そのように疑ったとき、その疑いを晴らすことは容易にできないというのがデカルトの結論であった。内外の感覚は、感覚である限り、確かな知識を与えるとは言えない。したがって、それが与える知識は夢のなかのこととして疑うことができる。しかし感覚を退けて、私たちが真であると確信できる知識はまだある。それは数理や論理の知識である。この知識は、たとい私たちが目覚めていようが夢を見ようが、真である。この知識はまったく疑い得ないように思われる。しかしそのように疑い得ないと考えること自体が実はそのように考えるようにさせている何物が想定されるのではないかと考え、このような知識に対しても疑いが可能であるとして、デカルトはもう一つの〈疑いの理由〉を提出する。彼は全能の神がいつも私たちを欺いて、 $2 + 2 = 4$ という命題においても私たちを何時も間違わせいているのかも知れないし、また悪しき霊が私たちを欺いているかも知れないと言っている。

デカルトの懐疑は、「私はかの懐疑論者たち、つまりただ疑わんがために疑い、いつでも非決定的の態度をよそう人々にならったのではない。私の計画はまったくその反対であって、みずから確信を勝ち得ること、動きやすい土や砂をかきのけて岩か粘土を見出すことだけを目差していたからである」(『省察』1)と述べているように、彼の懐疑は確固たる知識を求めるための懐疑であった。

ところで、デカルトは、既に述べたように彼が炉部屋において、思索しているときに、彼の着いている服とか、手にしていると紙とか、炉の傍らに腰を下ろしているとか、自分の肢体の存在などの自分の感覚与件は疑っていないし、数学的知識や論理学の知識なども疑ってはいない。デカルトの懐疑の論証の手続きは、疑いがさまざまに可能だということに、つまり疑いが考えられ得るということにある。例えば、自分にとって確実だと思われることが実は夢の中の出来事だと〈考えられる〉ということであるし、悪しき霊の存在を想定して、それが私を欺いて、私に対して私が確かだと思わせているということが〈考え

られる、あるいは想像できる」ということによって、自分がこれまで懷疑できないと考えていたことを全面的に懷疑することが可能だ、とデカルトは主張したのであった。

しかしこのように専ら疑いが〈考えられる〉というだけで、懷疑の理由とすることはあまりにも思弁的であると言わなければならないではないか。もしデカルトが疑い得ると〈考えられる〉ものが全て疑い得るとするなら、彼はそのように〈考えられる〉ということにもまた疑いをはさまなければならないのではないか。その点に関しては、事実デカルトは疑いをはさむことができると〈考えられる〉ということで、それで結局はそのようにさまざまなものを懷疑している自分の存在を疑い得ないものとして〈コギト・エルゴ・スム〉の命題をあらゆる確実な知識の営みの根拠に据えたのであった。この限りデカルトの懷疑の手続きは、一応もっともなように思われる。しかしデカルトの懷疑は彼が目差したような全面的な懷疑ではなかったということを認めなければならないであろう。

というのも、デカルトが意図したように、デカルトが真に疑い得るものを全面的に疑うとすれば、彼は疑いにさして用いている言葉や言葉の意味についても疑うのでなければならなかったであろうからである。彼の懷疑の論証にさいして〈懷疑〉という語の意味がまったく懷疑されていないのではないか。例えば、〈悪しき霊が私を欺くことに全力を傾けたとしよう〉(『省察』, 1), ということをデカルトは述べているが、彼はこの場合に〈悪しき霊〉という言葉の意味についての疑いも、〈悪しき霊〉というものの存在についての懷疑もまったくない。デカルトは、ただ〈悪しき霊〉ということが〈考えられる〉ということによって一切の事柄を疑っているのであるが、彼は自分が用いている言葉や言葉の意味について一切懷疑していないのである。それゆえ彼の懷疑は全面的な懷疑ではない。彼の懷疑は、知識が心的状態(精神的状態)とか心的過程にあると考えており、言葉の使用という観点にまったく注目していなかったのであった。

デカルトの懷疑は思弁的であった。デカルトは感覚与件や論理や数学的知識の確実性を承知していた。しかし確実性の根拠を求めてこれまで真理とされた知識や自分にとっても真であるかと疑い得ない知識をも全面的に懷疑に臥そうと試みたのであった。デカルトのいわゆる〈方法的懷疑〉は、デカルトが真理だと承知していた知識を根拠より基礎づけることにあった。その根拠とは神の誠実性に究極に求められ、それが人間理性にとって明晰・判明な知識の根拠となるべきものであった。このデカルトの発想は、神の知性と人間の知性との不連続性並びに連続性という見地から知識の確実性を基礎づけようとするものであった。そこでは知識は専ら心的状態(精神状態)という観点から捉えられて、言語ゲームという観点が排除されている。つまりデカルトの方法は心理主義的観点からの確実な知識の基礎づけであった。

懷疑に前提されるもの こうしたデカルト的な知識の懷疑論的論証は、ナンセンスであり、

〈懐疑の行為〉も言語ゲームのなかでされる一つのゲームであって、全面的懐疑の不可能性を論じ、私たちの知の営みは確実性に基礎づけられた言語ゲームであって、確実性そのものを何等の形で根拠づけることができない、という論議を提出したのはウィトゲンシュタインであった。〈すべてを疑おうとする者は、疑うところまでも行き着くことができないであろう〉(115)、〈どんな事実をも確実ではないとする者は、自分の言葉の意味をも確実ではあり得ない〉(114)、〈懐疑は懐疑されないものに支えられている〉(519)等のウィトゲンシュタインの主張にデカルト的懐疑における重大な見落としが指摘されているのである。デカルトの懐疑は何者によっても懐疑されないものに知識の根拠を求めようとするもので、究極的には神の存在より根拠づけが可能で、揺ぎない知識の存在を見出そうとする試みであった。この限りデカルトは、心的過程においての神とは質を異にしているにせよ、何か内面において連続した知性というものを人間に見て、そこから、知の体系が揺ぎないものとして確立できると考えたように思われる。

しかし私たちの知の営みをこうした内的な過程の知の営みに見る心理主義的な立場から把握するのではなく、言語主義の観点に立ち、言語ゲームという観点から見ると、明らかにデカルトはウィトゲンシュタインにより徹底的な批判を免れ得ないであろう。ウィトゲンシュタインは〈懐疑は懐疑されないものに支えられている〉(519)と述べているが、この懐疑され得ないものこそ言語ゲームを支えている基盤である。この基礎を前提にして懐疑のゲームが行われているのである。

2. 懐疑と懐疑に前提されているもの

学ぶことと信じること—言語ゲームの習得 「すべてを疑う疑いは懐疑と言われなければならない」(450)。懐疑に前提されている懐疑されないもの、それが懐疑のゲームの根拠になっているというのがウィトゲンシュタインの主張の要点である。つまり、懐疑のゲームにはそれ自体すでに確実性が前提とされている(115)。まず何よりも自分が使用している言葉の意味をも確実であるとしえないものは、懐疑することすらまったく不可能となろう(114)。その意味で懐疑のゲームをするにあたって、言語の習得が前提とされる。

言語ゲームの習得にあたって、〈疑うこと〉が最初にあるのではない。デカルトの言うように、「〈懐疑がないところでは知識もない〉というのであろうか」(121)。決してそうではないのだ。知識の習得にあたって、〈信じること〉が最優先するのである。信じることがなければ、何一つ学ばれないのである。私たちは知識の習得にさいして、子供のその習得の事実を目を向ける必要がある。「子供は大人を信じることによって学ぶ、疑いは信じることの後に来る」(160)。「生徒は自分の教師と教科書を信じる」(263)。「子供は教えられたことを直ちに疑うことがどうしてできるのか。疑うということは、ただ子供がある言語ゲームを習得することができないということだけを意味するであろう」(283)。

「生徒と教師、生徒が絶えず疑って、例えば物の存在や言葉の意味などを疑って（教師の言うことを）中断する場合、教師は何も説明することができないであろう。その時、教師は言う、〈私の邪魔してはいけない。私の言っているようしなさい。いま君が疑ってもまったく意味がないのだ〉」（310）。生徒がこのように何もかも疑うとすれば、それは〈空虚〉（312）としか言いようがないのである。言語ゲームの習得にあたって、「私たちに何かが基礎として教えられなければならない」（449）のである。

言語ゲームの習得にさいして、〈信じる〉ことが最優先する。また、私たちが〈ある語の用法〉を学ぶさいには、少なくとも直示的定義によって〈ある語〉を学ぶさいには、指し示されている対象の存在についての懷疑が排除されている。例えば、「子供が〈木〉という語を用い方を学ぶとき、大人が木の前に子供と一緒に立ち、〈素敵な木！〉という。言語ゲームには木の存在についての疑いが入ってこない」（480）のであり、「子供は本が存在するとか、椅子が存在する等を学ぶのではない—子供は本を取ってくるとか、椅子に座るとか等を学ぶ。無論後になって存在への問いも生じる」（476）。このように語の用い方の最も基本的となる直示的定義による教示にさいしても、学ぶ者はその語の対象の存在を信じており、その存在に関する懷疑が排除されている。ウィトゲンシュタインはこのように私たちの言語ゲームの習得の現実を強調し、さまざまな例によって言語ゲームを記述している。

「私たちは子供のときさまざまな事実を学び、例えば、どの人間にも脳があるということとを学び、そしてそれらの諸事実を信じてきた。私は、オーストラリア大陸が在り、その形はかくかくであることを信じている。また私には祖父母があり、私の両親だと言っている人が私の本当の両親であるということを知ってきた。こうした信念を決して言葉に表したり、それが事実であるなどという考えを抱いたことなどはないとしてもいいのだ」（159）、子供は教えられた事実を信じて学ぶ。そのように言語ゲームを習得することによって、子供は行為することを学び、次第に信念の体系を自分のものにしていくのである。「子供は多くの物事を信じることを学ぶ。つまり、このように信じることをもとにして行為することを学ぶのである。それから次第に信念の体系が形成される」（144）、「私は、私にある一定の仕方では伝達されたことを信じる。それゆえ私は地理や化学や歴史等の諸事実を信じる。このようにして私は諸学問を学ぶ。然り、学ぶことは当然にも信じることに基づいている」（170）。

ところで私たちが教えられるままに信じるのは、それまで信じてきたことが裏切られなかったからだと言っていいのか（170）。私たちが教えられてきたことが常に裏切られるような経験がある場合には、無論信じることはできないであろう。しかし私たちは人が私たちに教えることを信じなければ、一体何を信じていいのであろうか。〈私たちは学んだことを根拠として信じる〉（171）以外にないのである。私たちの言語ゲームの習得は疑いか

ら始まるのではない。学んだことを根拠として信じるのである。その場合に、この信念の根拠となる原理がなければならないのであろうか。しかしかりにその原理があったとしても、〈そのような原理は一体何に役立つのであろうか〉(172)。「基礎づけられた信念の根拠にはもはや基礎づけられない根拠である」(252)。疑い得ないところで、誰かが疑いのしるしを与えると、私たちはその疑いのしるしを疑いのしるしとして明確に理解できなくなるのである。つまり疑いのしるしをそのしるしとして理解するためには、疑いのある特定の場合に限り、その他の場合は疑わないようにしなければならないのである(154)。疑わないで信じることは、愚かなことであり轻信と言えるのであろうか(235)。否、そうではないのだ。「分別のある人間は誰もがこのように振る舞う」(254)。言語ゲームの習得は疑わず信じて学ぶことから始まるし、そして学んだことを実際に行うことにある。それに尽きてしまう。これが言語ゲームの事実である。この事実をもはや根拠づける必要はないのである。

信じて疑わない命題 ウィトゲンシュタインはデカルト的方法的懐疑のように、真であると確信したものに根拠づけをしているのではないのである。彼は、私たちの言語ゲームにおいて懐疑に臥してはいない現実の知の営みを記述しており、言語ゲームに要求されている基盤を記述している。言い換えれば、彼は、懐疑から逃れていなければならないものがなければ、現実の知の営みがなされないことに注目し、現になされている知識に関する文法の慣用を記述しているのである。

ウィトゲンシュタインはデカルトのように方法的懐疑によって確実性の根拠を見い出そうとしているのではない。彼はまったく逆に信じて疑わないでなされている私たちの言語ゲームの成立の基盤を記述し、現実の言語ゲームの慣用の文法を記述している。デカルトが徹底的な懐疑に身を委ねたにも拘わらず、まったく懐疑の対象から外したのは言語であった。しかし言語の営みを信用しなければ、そもそも懐疑の行為も成り立たないであろう。そのことを認めるとすれば、言語の営みがどのようにしてなされるのかという言語ゲームの事実への注目は当然のように思われる。すでに見てきたように、子供の言語ゲームに関する記述から、〈言葉の何か〉というのではなく、私たちが〈言葉の用法をどのようにして学ぶのか〉ということ明らかにされる。しかしながら、「ここで奇妙なことは、私にとって言葉の使用がまったく確実で、疑いがない場合でも、私は自分の行動の仕方の如何なる根拠も示すことができないということである。敢えて試みれば根拠はいくらでも与えることができよう。しかしそのどれもが、根拠づけられるべき当のものより確実なのではない」(306)。

ウィトゲンシュタインが信じて疑わないと言っている命題は、例えばおよそ、つぎのことである。「私は(女の)祖先を持っている。どの人間もそうであるとして信じている。

いろいろな都市があり、一般に地理や歴史に関する主な記述を信じている。私は、地球とはそのうえで私たちが生活している物体であり、そして地球が他の固体と、例えば、この机、この家、この木と同様に突然に消えてしまわないと信じている。私が自分の誕生の遙か以前の地球の存在を疑うとすれば、私にとって確実なものはすべて疑わなければならないであろう」(234)。「そして私が確信しているものは、私の愚かさや轻信にその根拠があるのではない」(235)。「私は自分の手について、〈これが私の手である〉と信じて疑わない。この種の確信は言語ゲーム全体の基礎にある確信ではないだろうか。あるいは言語ゲームではこの種の確実性がすでに前提にされている (446)。こうしたことを信ぜず疑うとすれば、懷疑のゲームも成り立ち得ない。一切の知の営みは成り立たないのである。

ところで、〈すべての人間には両親があるという信念は一体何に基づくのか〉(240)という問いには、〈経験に〉と答えることができる。〈私は私の経験に対して、この確信をどのように根拠づけることができるのであろうか。私はそれを或る人たちの両親を知っていたということに根拠づけるばかりではなく、人間の性生活、人間の解剖、人間の生理学に関して学んだことすべてに根拠づけることができる〉(240)。その他私が見聞したこともそれを証拠立てる。つまり動かない証拠を提出することができる。こうした類の証拠を提示しても、この命題に対する真の証明とはならないであろうか。それ以上の証拠を提示する必要はないのではないか。〈証拠を基礎づけ、正当化する営みは何処かで終わる〉(204)。このように経験的に確証されていることを疑うとしたら、私たちは一体それ以外の何を信じるのであろうか。

〈私には両親がある〉〈私には身体がある〉(私は自分に身体があるかどうか疑うと言え、彼をウス馬鹿とみなすであろう) (257)。〈私には手がある〉等の命題を私が疑うとすると、一体私は何を信じたらいいのであろうか。〈私はこの疑いを入れるような如何なる体系もまったく持ち合わせていないのである〉(247)。「私はここで私のすべての信念の基盤に達している。〈私はこの立場を保持するであろう〉。これ以上の確信を求める必要はあるのであろうか。デカルト的に明証性も結局はこうしたことの確実性を承知であった。それにも拘わらずデカルトはこうしたことをも敢えて懷疑に臥したのであった。そのことによってデカルトは、自己論駁に陥ってしまった。私たちは確実性の根拠を求める行為を何処かで打ち切らなければならない。言い換えれば、〈根拠づけられた信念の根拠には根拠づけられない信念がある〉(253) ということで打ち切らなければならない。

無論、「〈本を私のところに持ってきておくれ〉という命令に従う場合、そこに見えるのが本当に本なのかどうか確かめなければならない場合も無論考えられる」(519) というような事例もある。しかしそれは言語ゲームのなかで起こることである。この疑いには、〈本〉という語が何を意味するのかは既に知られている。またつぎの問い、つまり「私たちの言語ゲームにとってある場所では疑いが入り込まないのが本質的なのであろうか。そ

れとも疑いの微かな気配は感じられるのだが、确实性の感情さえ成立していれば満足するというのが本質的なことなのであろうか……」(524)という問いに対して、疑いが入り込んでもかまわないし、确实性の感情がなくともかまわないと答えることができよう。しかし〈原則として何らかの経験判断が疑いを免れていなければならないとは言えるであろう〉(524)。〈分別のある人間ならこのことに関して疑わない〉(452)ということを経験に命じる他ないであろう。一つ一つの疑いについて、何が分別のある疑いであり、無分別なのかどうかは言語ゲームがなされる状況から判断されるのであり、予め判断の基準を立てることができないのである。要するに全面的な懐疑が免れていればいいのである。ウィトゲンシュタインが信じて疑わないと主張する命題は、それらが経験命題であるとしても、語の用法が文法上論理的に要請されているものであると言えるのである。

言語ゲームの変遷—経験命題を導くもの 知識に普遍性を求める要求は、哲学の歴史の流れをとおしてつらぬいている要求である。しかしこの普遍性は極めて思弁的抽象的な普遍性の要求へと展開され行った。ウィトゲンシュタインの思索はこうした思弁的な普遍性に向けられていなかった。私たちの毎日の生の営みのなかでなされる自明な言語的行為の何かに向けられていたのであった。それは普遍的な懐疑によって演繹されるようなものではない。私たちの言語ゲームには無論懐疑のゲームも行われているし、疑いが排除されているのではないことは言うまでもない。それはすべてある信念を拠りどころとしているのであり、疑い得ないものの存在を前提としている(331)。疑いというのは、分別のある人間によって一定の状況のもとのみでなされる(334)。

ここで幾つかの例を示しておこう。「法廷の手続きでは、発言に一定の蓋然性を与えるのは状況であるということが前提とされている。例えば、両親なしに誰かが生まれてきたという発言はそこでは取り上げられない」(335)。また、実験がなされるのは疑いの対象とされない多くのこと存在が前提とされている。例えば、実験器具の存在を疑うことはしない(337)。「私たちの立てる問題と懐疑は、ある種の命題が疑いの対象から免れていて、問いや疑いを動かす蝶番のような役割をしていることに基づいている」(341)。「疑いの振る舞いと疑わない振る舞い—後者がある場合のみ前者があるのである」(354)。

しかし「人々が何を理に叶っているか、理に叶っていないと見なすかは変わる。ある時代では理に叶っていると思われたものは他の時代では理に叶っていないとみなされ、またその逆でもある」(336)。「言語ゲームが変われば、概念も変わり、概念と共に言葉の意味も変わる」(65)。「経験的諸命題の形式を持っているある種の命題が凝固して、固まらずに流れる経験的諸命題を導くものとして機能する。この関係は時と共に変わり、流動している命題が凝固し、凝固していた命題が流れ出す」(96)。言語ゲームは常にこのように流動する。それにもかかわらずと言いたいのは、先程挙げた〈信じて疑わない〉命題は、時

の変遷と共に変わるような言語ゲームにおいてさえ、確実なものとして前提されているような命題だということである。

3. 〈私は知っている〉というムーアの命題

ムーアの命題(1) — 懐疑論の論駁と外界の存在証明 — ところでムーアは〈私は確実に知っている命題がある〉と主張し、そのことを論証をしている。それらの命題は、つぎのようなものである。「これは手である」「私は月へ行ったことはない」「私の誕生の遙か昔から地球が存在した」などであり、ムーアはそれらの命題にそれぞれ〈私は知っている〉という言葉をつけている。ムーアがこれらの命題を引き合いにしたのは、懐疑論を論駁し、常識擁護の立場にたち、外界の存在が確実に認識できると主張するためであった。

ムーアは外界の存在(例えば〈これは椅子である〉などの命題)に関する命題については、認識論的には数学的命題と同じ確実性を持ち、疑い得ないと考えた。これに対してウィトゲンシュタインも同意し、つぎのように述べている。「私たちは、これが椅子であることも、 $2+2=4$ ということも同じ厳しさでもって学ぶ」(455)。「 $12 \times 12 = 144$ という命題が疑いから除外されているとすれば、非数学的命題に関してもそうでなければならぬ」(653)。しかし「これは椅子である」(また〈これは私の手である〉〈私の誕生のはるかに昔から地球は存在した〉等を含めた命題)というのは、ムーアの言うように〈知っている〉ことなのかどうかについて、ウィトゲンシュタインはムーアの見解に異義を唱え、ムーアの挙げる命題を徹底的に吟味するのであった。

「人は、自分が知っていることを(ムーアのように)枚挙することができるであろうか。そんなに簡単にはいかないと私は思う。一枚挙することができるというのなら、〈私は知っている〉という語の誤用である」(6)。ウィトゲンシュタインにとって、それらの命題はどれも認識の問題ではない。〈外界の存在を疑うこと〉は、例えば、後になって観察によって証明されるような、或る惑星の存在を疑うことではないのだ。それともムーアは、ここに手があるという知識が惑星の存在とは異なった種類のものであると言おうとするのであろうか。そのように言わないとすれば、土星が発見されているという事実を懐疑論者に示し、土星の存在は証明されており、したがって、外界の存在もまた証明されていると言することができるのである」(20)。

ムーアの命題(2) — 確信し、その反対を想像出来ない命題 — ここでムーアが〈私は知っている〉として挙げる命題は一体どんな命題であるのかをウィトゲンシュタインに従って吟味してみたい。「ムーアは、地球が彼の誕生ずっと以前から存在したのを知っていると云う。このように言えば、それは物理的世界についての言明であるとともに彼個人についての表明であるように思われる。ムーアがあれやこれやについて知っているかどうかは哲

学的には問題とはならないのであって、哲学的にはそれが知られていることが問題であり、そしてそれがどのようにして知られるのかが問題なのである。ムーアが私たちに、ある星と星との間の距離を知っていると伝えたとしたら、私たちはそのことから彼が特別な探究をしたということを推理するであろうし、どんな探究をしたのか聞こうとするであろう。しかしムーアが選んだのは、ムーアが、自分が知っているとして選んだものは、まさに私たちすべてがまた知っているが、どうして知っているのかを述べるができないようなものである。例えば、私は、この事例（地球の存在）についてムーアと劣らずに知っていると感じており、彼が言っているように、彼がそのことを知っているなら、私もまたそのことを知っているのである」（84）。ムーアが〈私は知っている〉として挙げる命題は、たんにムーアが知っている命題ではない。「ムーアが彼が知っている主張する真理は、彼が知っていると言うのなら、私たち皆も知っているというような命題である」（100）。それゆえ、「ムーアは〈私は……を知っている〉と言う代わりに、〈私には……が確実である〉とか、〈私にとっても、他の多くの人たちにとっても……が確実である〉と言ってよかったのではないか」（116）と言える命題である。（註、ゴシック体は筆者がつけたもので、以下一つの文全体につけたゴシック体はすべて筆者のものである。）

したがって、「ムーアの〈私は知っている〉という諸命題を、〈私は揺がない確信を持っている〉という諸命題に置き換えてみたらどうなるか」（86）。そうすれば「ある種の命題に関して、その表明される場合にまったく疑いの余地がない。私たちの探究のすべてがそのようになっていると言えるのではないか。それらの命題は探究が進めらる、その道から離れている」（88）。「地球が存在した」等と言うことを知っているムーアが言うとき、大抵の者は地球が非常に長い間存在しているという点で彼の正しさを認め、そしてまた彼がそのことを確信していると言っていることを信じるであろう」（91）。ここに述べられているように、〈私は知っている〉という命題は〈揺がない確信を持っている〉と言い換えることのできる命題であり、〈疑問の余地の無い〉命題であり、その主張の〈正しさ〉を認め、彼と共に私たちも〈確信している〉命題である。

その意味において「ムーアが〈知っている〉と述べている命題はすべて誰もがその反対を信じる理由を想像するのが困難な命題である」（92）。〈地球から殆ど離れることなく過ぎた〉という命題のように、私たちはムーアではなく自分自身のこととして語ることができる。その反対を信じさせるようなものがあるのであろうか。記憶であろうとも人から聞いたことであろうとも。一私が見たり聞いたりしたことすべては、地球から遠く離れた人間はいないことを私に確信させる。私の世界像にはその反対のことを語るものは何一つとしてない（93）。と言っても、この私の世界像は、私が正しさを確信しかからと言って、私のものになったのではなく、私の受け入れとか、正しさとの確信は、私が伝承として受け継いだものである。私の確信はこうした伝統を背景にしている（94）。ウィト

ゲンシュタインは、〈揺ぎない確信〉とか〈疑問の余地がない〉という言葉で、誰もがその主張の〈反対を信じる理由がない〉という言葉で表現しており、そしてこのような〈正しさの確信〉は単なる私個人の信念ではなく、私が〈伝統として受け継いだもの〉であり、こうした確信は〈伝統は背景にしている〉と主張する。

ムーアが〈私は知っている〉として挙げるとの命題も私たちすべてにとってまったく確実であって、私たちすべてが揺ぎなく確信している命題であるが、しかしながら、この命題をある種の原理から基礎づけることができるような命題ではないのである。例えば、〈私は月に行ったことはない〉という命題を挙げても、このことは私にとってまったく確実であって、それ以上の確実な根拠を与えることのできない命題である(111)。つまりムーアの命題は〈まったく確実で〉であって、それ以上の根拠を与えることのできない命題である。([『哲学的探究』, 参照)。

ムーアの命題(3) — 経験命題の体系における論理的役割 ウィトゲンシュタインは〈一種の神話学〉(95) という語を用いて、世界像を記述している命題は一種の神話学に属している(95) と述べている。私たちがある生活共同体において言語ゲームを習得して生活しているが、そうした言語ゲームの習得は伝統として受け継いだものであり、私がいちいち正しさを納得して受け入れたものではない。いわば盲目に受け入れたものと言えるものである。彼の言う〈神話学〉とはそうした私たちの言語ゲームの受け入れのことを指しているように思われる。彼はこうした命題の役割をゲームにおける規則の役割に似ているとしている(同)。ただし、ゲームは何も規則を学ばなくても実地で習得できるものである。

ムーアが挙げている諸命題は、どれもが何らかの探究によって得られたような命題ではない(138)。例えば、〈地球の存在〉に関連して言えば、その歴史の研究とか、地球の形や年齢に関する研究があるが、地球が最近百年間存在したかどうかという研究はない。

〈これが私の手である〉という命題に関しても同様で、手に関する解剖学的、生理学的研究はあるが、〈これが私の手であるかどうか〉に関する研究はない。この百年という地球の存在した期間についての情報を私たちは周りの者や学校などで聞かされてそれを自明なものとして受け入れている。それにもかかわらず、それらの情報を間違っていると言うとすれば、人々から〈まったくナンセンス〉として相手にされないであろう。私たちは日常生活においてこうした類のことを疑問の余地のないものとして受け入れている。ウィトゲンシュタインはムーアの挙げる命題を探究で得られた命題と区別する。ムーア型の命題は、いちいちその正しさを検証に訴えたり、確証したり反証したりするような命題ではない。その意味で、それらは一種の神話学に属する命題と言えよう。

「ムーアが、私がかくかくしかじかの命題を知っている、と言う場合、それは特に私たちが吟味せずに肯定するようなまったくの経験命題である。したがって、私たちの経験命

題の体系において特有な理論的役割を果たしている命題なのである」(136)。「ただたんに誰かが、その者がたとい信頼のおける人であったとして、〈私は……を知っている〉と断言したとしても、それだけでは彼がそのことを知っているということを私に確信させないのである。彼は確かに信じているということは分かる。したがって、ただ〈私は……を知っている〉と言っただけでは何の興味も起こさせない。しかしムーアがそのように知られた真理の例として枚挙している命題は興味深い。その理由は誰かがその真理を知っているとか、知っていると信じているからではなく、それらがすべて私たちの経験判断の体系において、ある類似の役割を果たしている命題であるからである(137)。

このようにしてみると、「ムーアが、〈私は知っている〉と主張していることは実は知っていることなのではない、と私は言いたい。彼は私と同様に確信しているのである。それを確信していると考察することが、私たちの懷疑と探究の方法に相応しいことである」(151)。「私は私が確信する命題をはっきりと学んだのではない。私はコマ状に運動する物体の回転軸のようにそれらの命題を後から見い出すことができるのである」(152)。これはまさにデカルトのようにコギトの確証によって定められるような知識ではないし、根拠から導出されたものではない。私たちのある状況では決して間違えることが出来ない。この出来ないとか、出来るというのは言語ゲームにおいての論理的な意味を担っている語である(155)。「もしムーアが彼が確実であると言っている諸命題と反対のことを申し立てるなら、私たちは彼の見解に同意しないばかりではなく、彼を精神錯乱状態にあるとみなすであろう」(同)。ムーアの挙げる命題は、一般的に〈知っている〉とされている命題ではない、それとは同列な命題ではなく、そうした命題を導くための導管となっている命題(96)であり、論理的な役割を担っている命題である。私たちは、ノーマルな言語ゲームを営む限りそれらの命題を決して間違えることがないのである。それに異義を唱えたなら、その者はまさしく精神錯乱状態にあるのである。

ムーアの命題(4) 一 根拠を与えることが出来ない命題 「ムーアが月に行ったことがないと想定する主な根拠は、誰も月にいたとがないし、行くことが出来ないということである。このことを私たちは学んだことを根拠にして信じている」(171)。それに対して〈それにしても信頼の根拠となる原理がなければならない〉というデカルト的な根拠の要請がでてくるのかも知れない(172)。しかしそのような原理はウィトゲンシュタインの立場からすれば、何の役も立たない。彼の立場からすれば、それだけで充分であり、原理よりの根拠づけはまったく必要ではない。例えば、〈私はそこに椅子があると信じている〉。私はそのことについて間違えることがあり得るのであるだろうか。自分が間違っていると信じる事が出来るのであるだろうか。こういったことをそもそも問題にすら出来ないのではないか。こうした私の信念は根拠に基づくのであるだろうか(173)。「私は完全な確信をもって行為する」

(174)。「私は〈それを知っている〉と他人に言う。この場合には正当化できる。私の信念については正当化すること (justification) はできない(175)。私の信念を正当化できないとしても、しかし私は間違っただけで行為するのではない。ムーア型の命題を間違っただけで行為するとすれば、私は何らの確固たる信念を持ち得ない。このように私は確信して行為するが、しかし私は自分の信念に根拠を与えることができない。ムーア型の命題は、そもそも認識論の問題ではないのであり、真偽の条件を問っていることでもないのである。ムーア型の命題は端的に正当化されているのでなければならないのである。しかし正当化は私がするのではない。私が所属する言語共同体において既に正当化されているのである。このように私はウィトゲンシュタインの〈私の信念については正当化できない〉(174)の言明を解釈する。

ムーアの命題(5) — 〈私は知っている〉という語の誤用と生活様式の一致 — したがって、ムーア型の命題は、〈私は知っている〉という認識的演算子を付ける必要のないものである。ムーアは懷疑論者の主張を論駁するために、そして常識を擁護し、外界の存在を証明するために、敢えて〈私は知っている〉という認識的演算子を付けた命題を枚举した。しかしムーアは間違っていた。それらは知識の問題ではない。例えば、〈地球は存在する〉といったような命題は、〈私の信念の出発点となる全体的な像の一部なのである〉(209)。また〈すべての人間には両親がある〉という命題は〈おそらく遙か昔に私たちの考察のすべてを支える足場に組み込まれてしまった〉(211) 命題である。その意味でムーア型の〈私は知っている〉という認識的演算子の付いた命題は、知識を主張する命題ではない。まさしく〈私は知っている〉という言葉の誤用である(6)。その言葉は余分というよりは端的に無意味なのである。

「〈私は知っている〉の代わりに〈それはかくかくしかじかだ。大丈夫だ〉、とか〈そのことを何年か前に習った〉とか、〈確かに、その通りなのだ〉と言うことも多い」(176)。つまり「私は知っていることを私は信じているのである」(177)。ムーアが〈私は知っている〉という語を添えているのは、〈疑い得ない〉とか〈確信している〉ということの表明であり、決して〈知っている〉という語のノーマルな用法を記述しているのではないのである。「〈私は知っている〉という表現を私はノーマルな言語交信における使用のために取っておきたい」(260)。つまり〈知っている〉という語にはノーマルな言語行為においてそれに相応しい用法があるのである。(その用法については後に論じたい)。

〈地球は私の誕生の遙か以前から存在していた〉ということは疑い得ない。この命題についての理に叶った疑いなどは想像できない(261)。ただし、私たちはある教育によって、〈地球は五十年前に存在したと教えられて信じている人を想像することもできる〉、またその者に〈地球は遙か昔から存在しているなどと教えることも想像できる〉。こうした試み

は私たちが世界像を学ぶ在り方であって、それは一種の説得によってなされるものであり(22)、私たちは教えられたことを信じて学ぶ(286)。そのさい、私たちが受け継いだ伝統を背景にしてとか、ある言語共同体において経験を共有するとか、または共通な生活様式を体験していることが前提とされており、私の確信はこうした生活様式の体験に基づいている。

ここで生活様式が異なった人たちとの言語交信の例を引き合いにしてみたい。「ムーアがある未開の民族に抱えられて、そして彼らに彼が地球と月の間の何処からかやって来た人間だという嫌疑をかける。ムーアはそれに対して、〈私は……を知っている〉と言うが、彼は彼らに自分が確信している根拠を与えることができない。こうした事例を私は想像できる」(264)。これはムーアと未開人たちの生活様式が異なっているからであり、未開人たちは物理学の知識がないからである。ムーアの物理学の知識からして、彼らにムーアの正しさを説得することができないのだ。彼らは自分たちの経験に基づいて自分たちの主張を信じている。このような彼らの信念が間違っているというのは、ムーアを育んだ社会の知識の営みを背景にしてのみ可能である。彼らの基準に従えば、ムーアの主張は認められないであろう。「知識は究極に承認に基礎づけられる」(378)のであり、「私たちがそのことを確信しているというのは、ただたんにどの個々人もそのことを確信しているということだけではなく、学問と教育とによって結ばれた一つの共同体に私たちが属していることを意味する」(298)。言い換えれば、プラクシスの参与へにとって、ムーア型の命題は〈疑い得ない〉命題であり、ア・プリオリに成り立つ命題ではないが、知識の営みの基礎となっている命題である。

「私が……を知っていると言う場合、分別のある者なら私たちの立場にあれば、同じことを知っているはずで、それを疑うのは無分別だということを意味している。ムーアも彼が知っていると知っているばかりではなく、彼の立場におかれた分別のある者は誰もがそれを知っているはずだと言おうとしている」(325)。さきほどの未開人の例は、ムーアの立場からすれば、分別ある者とは考えられないのである。しかし未開人からみればどうなのであろうか。

ムーアの命題(6) —ムーアの命題に対する反省と哲学的問題の解消— ウィトゲンシュタインがムーアの命題をさまざまに分析して、導こうとしているのは、ムーア型の命題は〈認識論の問題ではない〉ということである。懐疑論者が問題にしていることは、認識の問題なのであり、そのような論議に対して、〈私は知っている〉というような認識的演算子をつけても、それは論駁にならない、ということである。したがってムーア型の命題によっては懐疑論者に反駁を加えることは無意味だということである。それにしてもムーアの問題提起を無意味だとは言いきれないというウィトゲンシュタインの思いや、あるいは

もしかしたらムーアが正しかったのではなかったのかという思いを『確実性の問題』の叙述にさまざまな形で垣間見ることができる。

「ムーアが言っている意味において〈これが私の手であることを私は知っている〉というのは、ほぼ以下の言明と同じことを意味すると言えるのではないか。〈私のこの手が痛む〉とか〈この手はもう一方よりも痛む〉とか、〈ずっと前に私のこの手の骨を折った〉など、その他のさまざまな言明を用いて言語ゲームを営むが、その場合問題となっている手の存在はまったく疑わない」(371)。〈このように疑われていないものが、ムーア型の命題から帰結されているのではないか〉〈そうだとすれば、これは言語ゲームの営みにとって何が基礎となっているのかを指摘していることではないか〉。それなら、「この確実性を早計や皮相的なものの類とは見なしたくない。むしろ〈一つ〉の生活様式と見なしたい（これはまったく拙劣な表現であり、まったくまずい考え方なのであろう）」(358)としてウィトゲンシュタインはムーア型の命題についての自分の思いや表現についてのためらいを告白している。さらに「私が間違っていて、ムーアが完全に正しいのではないか。私は人間の考えることと知ることを混同する基本的な間違いを犯したのではないか。無論私は〈地球は私の誕生の少しばかり前から存在していた〉とは考えない。しかし私はそれについて知らないのであろうか。その命題の帰結を引き出すことで、私がそれを知っていることを示しているのではないか」(397)と述べ、自分のムーアに対する見解に反省をしている。そしてつぎのように「私はここで風車との闘いに走る傾向にある。その理由は、私が真に言いたいことをまだ言えないからなのである」(400)と告白している。

このようにして彼はムーア型の命題に批判的でありながら、それでもまだ明確に裁断できないでいる様子が述べられている。こうした反復からウィトゲンシュタインはこれまで自分が述べてきたことを確認するかのように、つぎのように述べる。「矢張りムーアのように〈私は知っている〉という言い方をすれば、それはどうみても、私の知についての言明であり、認識論の問題に言及していることになるのだ」(401)。「ムーアの言うように、彼があることを知っていると言うこと、それゆえ彼の言っていることは無条件に真理であると言うことは、私には間違っているように思われる。それが真理であるのは、その言語ゲームの揺ぎない基礎である限りなのである」(403)。したがって、ムーア型の〈私は知っている〉は、そうした意味の真理なのではない。ムーア型の命題は、ある意味では論理学の命題と同様思想（言語）の操作の基礎となる〈経験命題の形式を持った命題〉(401)と言っているのかもしれない。こう言いながらもウィトゲンシュタインはそれをまだ断言できずに、つぎのように述べる。「しかしこのような表現も的確ではない。というのはそのような命題は対象に関する言明であって、偽となることがあり得る命題のことであるからである」(402)。ムーア型の命題はそうした命題ではない。と言っても、無条件に真理を表明している命題でもない。間違い得ない命題であることは確かではあるが、完全な確

実性を持っているような真理なのではなく、私たちの言語ゲームの基盤になる限りににおいて真理とされる命題なのである。彼の命題の確実性は、私たちの言語ゲームを支える態度に関することなのである (404)。〈しかしこのように述べてもまだ間違いがある〉 (405) と執拗なまでも適切な表現を求めてウィトゲンシュタインは思索を続けるのであった。

このためらいから、ウィトゲンシュタインは明確にしようとしている問題をつぎのように述べる。「私が目指しているのは、〈私はそれが……であることを知っている〉という日常の生において用いられていることの確認と哲学者がする確認との違いにある」 (406)。つまり、「ムーアが〈私は知っている〉ということを哲学の問題として言うなら、ムーアが間違っている (正確には〈きみは何も知らない〉) と言いたくなる。哲学的な意図を持たない人が同じことを言う場合にはそうは言わない」 (407)。ここにウィトゲンシュタインの真意があるように思われる。言い換えれば、ムーアが認識論の問題として〈私は知っている〉という命題を枚挙している点に間違いがあるのだということを主張しているのである。ムーアの命題に関して、確認すべきことはつぎのことである。「私たちは地球が遙か昔から存在していたと想定する」とか、それに類したことを想定するとすれば無論おかしく響く、しかし私たちの言語ゲームの全体の体系では、この命題は基礎になっている。この想定が私たちの行動の基盤であり、したがって当然思考の基礎である」 (411)。

「〈私はPを知っている〉というのは、私もPという真理を知っているということを請け合うためである。あるいはPという定義の強調としてである」 (424)。〈私はそう信じているのではない、知っている〉とも言ふ。また〈それはそうなのであり、たんなる推測なのではない〉とも表現できよう (同)。〈このことがムーアの言おうとしたかったことであろうか〉というウィトゲンシュタインの問い。「〈無論私があれがタオルであることを知っている〉と言う場合、私はある表出をしている。検証のことを考えているのではない。それは直接的な表出である」 (510)。「それは端的に何かを掴むのと同じである。私は疑いなしにタオルを掴む」 (同)。このことを認めなければならないであろう。認めるとすれば、「ムーアは知っているというのではなく、信じていると答えてよいのである」。「ムーアの主張は、人は知り得ないということを〈私はそれを知っている〉と反対して述べたのである」 (521)。

「ムーアが知っていると言っている真理は、彼がそれを知っているなら私たちもみな知っていると言っているような真理である」 (100, 参照, 84)。「なぜムーアは、彼が知っていて、私たちすべてが知らないような事実を挙げなかったのであろうか」 (464)。ウィトゲンシュタインに従えば、〈ムーアは懐疑論者を論駁しようとしていたことは事実である〉。

しかしムーアが〈私は知っている〉と主張したことを少なくともただある特定の状況においてなら正しい。(〈私は人間であることを知っている〉)ということがどんな意味なの

か無論私は知らない。しかしそれにもある意味を与えることができるのだ。そうした命題どれにも、言語ゲームの一つとして意味を持ちうるような状況を私は想像することはできる。そのことによってその命題から哲学的な異常さが消えてしまう (622)。

以上のウィトゲンシュタインの問いとそれとの応答から、彼の強調は、ムーア型の命題から、〈私は知っている〉という認識的演算子を取り払い、哲学的異常さをこの命題に持ち込まないことにすることにあり、ただ端的に言語ゲームにとっての基礎となっているということを承認すればいいということにあるように結論を導くことができるように思われるのである。

4. 〈私は知っている〉という命題の諸用法

ウィトゲンシュタインはムーアの〈私は知っている〉という命題を取り上げ、それらのどの命題も一般的に言って、〈知っている〉という語の慣用に反するものであると主張している。それでは一般的に〈知っている〉という語によってどんな用法があるのであろうか。「〈私は知っている〉という表現をノーマルな言語交信における使用のために取っておきたい」(260)。ムーアが〈私は知っている〉という形で提示した形の哲学的な問題としてではなく、ノーマルな言語使用における〈私は知っている〉という語の用法について、ここでウィトゲンシュタインに従って展望してみたい。

(1) 〈私は知っている〉は心的状態ではないこと ウィトゲンシュタインは、まず第一に知識の問題を心的状態とか心的過程の問題として受け取っていないということである。「内的な体験は私に何かを知っているということを私に示さないということである」(568)と述べ、彼は〈私は知っている〉ことが心的過程とすることや心的状態であることを否定するのである。「私たちはつぎのように尋ねる、〈私は……を知っている〉という表現によって何をするのか。つまりそれは心的過程や状態に関する問題ではないのだ。そのようにしてあることが知識であるのかどうかを決定するのではなければならないのだ」(230)。〈どうして……を知っているのか〉という問いに対して「私は……を学んだからである」(583)と答えれば充分であって、それ以上のことは必要とされない。つまり知の源泉についての問いは、言語ゲームの観点から答えるだけで充分とするのが一般的な振る舞いであるというのがウィトゲンシュタインの言いたいことである。

「〈知識〉と〈確実性〉は異なったカテゴリーに属する。それは〈推量〉と〈確信〉とのような〈心的状態〉ではない。(ここで私は〈私は(例えば)‘疑い’という語の意味を知っている〉ということは有意味であり、またこの命題が‘疑い’という語にある論理的な役割を指示する、ということを想定している)。いま私たちが問題にしているのは、確実性ではなく、知識である。つまり、何らかの判断がそもそも可能なのは、ある経験命題に関しては疑いがあり得ないということが問題なのである。」(308)。したがって、〈知ること〉

と〈確信すること〉との論理的な区別が必要とされるということである。

(2)言語ゲームの基礎となっているのは学ぶことであり、行為ができることである。〈私は知っている〉は言語ゲームの基礎にあるのではない。「〈私はこの色が‘赤’と呼ばれることを知らなければこの花を記述することはできない〉」(542)。確かにその通りである。しかし子供の言語ゲーム習得の有様を見るがいい。「ようやく言葉を話せるようになり、〈赤〉と〈青〉という語は用いることができる子供に対して、〈この色は何と言うのが知っているね〉とはまだ言えない」(547)。「子供が色の名前の適用を尋ねる前に色の名前を学ばなければならない」(548)。

子供は〈知っている〉という語が何を意味するのかは分からなくとも、〈赤〉とか〈青〉という語を用いることができる。最も原初的な言語ゲームとして挙げられている〈石材のゲーム〉においても示されているように、そこでまず〈知っている〉ことを学ぶのではなく、〈石材のゲーム〉ができることを学ぶのである。その意味で、〈知っている〉ということは決して言語ゲームの基礎になっているのではない。〈私は知っている〉というのは教えられたことを信じ、実践していくなかで用いられる語であり、それは基本的には証拠を引き合いにして営まれる言語ゲームにおいて用いられている語である。したがって、それはたんに〈私だけが知っている〉ことに関わっているのではない。私と共有する言語共同体の知識の体系において他の成員たちとの間でなされる言語ゲームに関わっている語の用法である。

(3)〈私は知っている〉という語の用法(1)―証拠に支えられていること　まず〈私は知っている〉は「動かぬ証拠を提出する用意のある場合である。〈私は知っている〉は真理の証明の可能性と結びついている」(243)。「私はあることを知っているということの証明となるのは何か。私はそれを知っていると自分で言うだけでは証明には決してならない」(486)。「〈私は知っている〉という発言は、私の〈知っていること〉を証拠立てるものと結びついている場合にだけ意味があるのである」(432)。〈私は知っている〉というのは主観的确实性を表明するのは知識ではない(245)。こうしたことを私に確信させるのは経験である。経験は私たちがいる状況におかれればかくかくのことを知ると教えてくれる。例えば、「経験は、人が一軒の家に何日も暮らせば、普通の場合その家の勝手を知るということを教える」(434)。この知識は私のたんなる経験ではなく、他人も私と同様な状況におかれれば、同じ経験をするであろうということなのである。したがって、総じて私の知識の源泉は他人の経験に根差している(275)と言えるのである。それゆえ、〈私は知っている〉と言えるのは、他人に納得させることの証拠を示すことができる場合である。〈私はPを知っている〉と言うのは、〈私はPという真理を知っているということの人々に保障するためである〉(424)。例えば、「〈私はこのドアの後ろに通路と地下室へ行く階段があるのを知っている〉という言明も、私がそのことを知っていることを誰もが考えて

いるからこそ、確実だと受け取っている」(439)。

(4) 〈私は知っている〉という語の用法(2) — 誤謬の可能性があること 〈私は知っている〉という語は基本的に証拠を支えとして用いられるのであるが、それには事実その通りであるとは限らない事態も起こる場合もある。つまり 〈私は知っている〉という私の言明に誤謬の可能性が含まれている。「〈私は知っている〉は、知られた事柄がまさしく事実であると保障するような事態を記述しているように見える。そこで人は〈私は知っていると思った〉という表現のことをまったく忘れてしまう」(12)。〈私は知っている〉という語は正常には証拠に支えられた言明であり、発話者のそうした確認を表明するものではあるが、しかしいつも客観的な証拠に支えられた発言とは限らない場合もある。例えば、「〈私はそれを知っている〉と私が言う度に、その言明が偽りだと判明することも確かにあり得るであろう」(580)。「私が〈そこに椅子があるのを知っている〉と言えるのは、実際にそこに椅子がある場合に限られているというのは、実際にそこに椅子がある場合に限られているというのは間違いであろう。しかし、たとい間違っているとしても、そこに椅子があると確信していれば、そう言っているいいのである」(549)。これが日常の〈私は知っている〉の語の慣用である。少なくとも〈私は知っている〉と発話する場合には、発話者の確信を表明をしていると言える。その意味で、〈私は知っている〉といのうは、真理を表現しようとする発話者の態度を表現している。この表現に語謬があってはならないと言うのではない。証拠によって訂正を受ける可能性のある表現でもある。

(5) 〈私は知っている〉という語の用法 — 〈私は……であるのかどうか知らない〉という語との対比において 〈私は知っている〉という語の用法を展望するにあたり、その語の否定である〈私は知らない〉という語の用法との対比が必要であろう。例えば、〈これは私の手であるのを私は知っている〉の否定である〈これが私の手であるのかどうか知らない〉という語の用法を考えてみよう。ノールマな状況において、人が自分の手について、〈これが私の手であるのかどうかを知らない〉など言うことは大変おかしいことで、誰かがそのように言った場合には、その者は冗談を言っているのか、それとも精神錯乱状態にあると受け取られよう。

このように〈私は……であるのかどうか知らない〉という発話が、奇妙に受け取られる場合は、明らかに〈私は知っている〉という語の用法も誤用である。つまり通常私たちは自分の手について、〈これは私の手であることを私は知っている〉などとは言わないからである。また、逆に奇妙に受け取られない場合には、〈私は知っている〉という語は有意義な使用をもつと言える。例えば、〈あそこに椅子がある、ドアがあるのを私は知っている〉という使い方はする(7)。この場合の〈あそこに椅子があるのかどうかを知らない〉という語は用法もノーマルな用法である。しかし自分が病人のベッドに付き添いをしている時、〈ここに病人が寝ているのを私は知っている〉(10)というようなことは一般的には

言わないし、また〈ここに病人が寝ているのかどうかを私は知らない〉とも言わないであろう。したがって、〈私は知っている〉という語が用いられるのは、その否定である〈私は……であるかどうかを知らない〉という語を添えてもおかしく思われない場合である。無論、〈私は知っている〉という語の普遍的な用法などはない。その語の有意義性は、発話がなされるコンテクストに依存しているのである。

(6) 〈私は知っている〉という語の特殊な状況での用法とその他の用法 このように言っているような状況もある。例えば誰かに〈ベットに寝ているのはどんな人か〉尋ねられた場合には、〈私は病人が寝ているのを知っている〉と言っている。そのときは〈……であるかどうかを知らない〉と答えることが可能であるからである。この意味で一般的に使用される〈私は知っている〉という語の用法は如何に特殊なものであり、状況に依存しているものであることを人は見落としがちなのである。

特殊な状況においては、ムーア型の命題に〈私は知っている〉という語をつけてもかまわない。「〈私は知っている〉をムーア型の命題〈私は知っている〉という語をつけてもかまわない。「〈私は知っている〉をムーアが言及したようなコンテクストで用いることは、少なくとも特定の状況においてでは正しい。(〈私は自分が人間であることを知っている〉がどんなことを意味しているのかは、確かに私には分からない。しかしこのことにもある意味を与えることができるであろう)。このような命題全てに対して、私は私たちの言語ゲームにおいてなされる一ゲームとするような状況を想像することができる。そのことによってその命題から哲学的な奇妙さというのが消えてしまう」(622)。この主張から分かるように、この特殊な〈私は知っている〉という語の用法はムーアが言っているような懐疑論者の論駁というような問題とはまったく関わっていない。

特殊な状況では、ムーア型の命題においても〈私は知っている〉という語を用いられることもあるが、通常では、ノーマルな表現とされている発話、例えば〈私はL・Wの生年月日を知っている〉というような表現であっても、その発話状況に相応しい場での発話でなければまったくナンセンスである。「私が友人と座って話をしているさい、突然、〈あなたはN・Nだと言うことを最初から知っていた〉と私は言う。これが真なる発言であるが、しかし本当に余計なことなのであろうか。私はこれらの言葉は会話の最中で〈今日は〉と言っているように思う」(464)。

通常、〈私はPであることを知っている〉ということが適切であるのは、私がPであることについて、〈それはPである〉と言うこと以上の確信を表明したり、確かな根拠を与えることができる場合である。しかし〈私は知っている〉という表現では、こうした証拠を支えとしない〈表出〉として発せられる場合もある。例えば、「〈無論、私はあれがタオルだということを知っている〉と言うとき、私はある表出をしており、検証のことは考えていない」(510)。

上述以外の〈私は知っている〉という語の実際の用法として、ウィトゲンシュタインは、〈私は知っている〉という語と同じように用いたり、あるいは類似な用法を挙げている。例えば、〈私は知っている〉は、〈私は見る〉に類似している(90)とか、その言明が偽ではないという点で、〈信じる〉〈推測する〉〈疑う〉〈確信する〉といった概念に類似的である(21)。〈私はそれを知っている〉というのは〈私はそれになじんでいる〉という意味もあり、〈確かに、そうだ〉という意味もある(582)。〈私は知っている〉ことはまた〈信じている〉ことでもある(177)。〈私は知っている〉は〈私は信じている〉ということと極めて類似している用法である。〈私は知っている〉というのは、私があることを信じる用意があるということの表明である(330)。〈私は知っている〉は正当化を基本的に必要としている用法であるが、それに対して〈私は信じている〉はそうした正当化はない(175)。その意味で〈私は信じている〉というのは主観的真理を表し(179)、〈私は知っている〉はそうではない(同)。しかし〈私は知っている〉ことは私の信念の体系に基づいている。私の知を私が確信をもって行使するのは、私の信念の基礎づけられているからである(332)。

〈私は知っている〉という語の論理的役割と言語ゲーム 〈私は知っている〉という語の用法の論理的役割を予め決定するようなものを私たちは持つことができないが、〈私は知っている〉という語の一般的な用法として、まず〈知っている〉ということについて、確固たる証拠を示すことが出来るということの表明と解される。「〈私は……を知っている〉という発言が意味をもつのは、ただ“知識”に関して別に証拠と結びつけられた場合である」(432)。そしてその具体的な慣用として、「〈私は……を知っている〉という断言を私が用いることができるのは、彼がそれから無条件に私の知識を推論しなければならないようなことを彼がまた知らない場合なのである」(433)とか、あるいは、「したがって、私が誰かに〈あれは木であるのを私は知っている〉と言う場合、〈あれは木だ、絶対に信用していい、疑いの余地はない〉と言うのと同じことなのである」(433)。その場合では、「ある場所に何があったのか私は知っている」と断言しただけでは充分ではない。—私はそれを知る立場にあったということを(他人)に納得させるような根拠を挙げるのでなければならない」(438)。さらにまた、〈私はそれを知っている〉と言うのは、理解を確かめるという場合もある。「人は私の言明の真理性に対して、この言明に関しての私の理解を確かめるのである」(80)「つまり私がある種の間違っただけの言明すれば、そのことによって私がその言明を理解しているのかどうか不確かとなる」(81)。そしていずれの場合にしても、その発話に相応しい状況があるのでなければならない。誰かが自分の手を見つめ、〈これが手であることを知っている〉と断言する場合も、私たちがその発言がなされた状況を知らない場合には、信用すべきものとはならないであろう。状況を知っておれば語り

手がこの観点ではノーマルであることが保障されるように思われる(441)。そして結局は〈私は知っている〉という語の慣用は、実践的行為に導くものでなければならないであろう。「私の知識が行為の手引きにならないのなら、一体何の価値があるのであろうか。」(409)。

〈私は知っている〉ことに関するウィトゲンシュタインの論議は、つまるところ〈私は知っている〉という語の文法の慣用を記述することにあつたと言えよう。彼はこの記述に徹したのであり、〈私は知っている〉という語の用法の体系を記述しようとしたのではなかった。彼のこの記述には形而上学的なアクセントがない。少なくとも彼は意識的に形而上学的な発想を避けたし、また認識論的に展開することも避けたのであつた。彼のこの用法の記述は多義的で、決して明晰ではないが、それでも彼の懸命な思索の記述から看取されてくるものは、その語の用法の論理的考察なのである。「ある言明に関して十分なテストとして妥当するもの、—それは論理学の問題である。それは言語ゲームの記述の問題である」(82)と述べて、彼は〈私は知っている〉という語の用法の記述の基礎となるものに目を向けたのであつた。ある言明が真であるためには、真偽を可能にするような枠組みがすでにあるのであって、そうした枠組みの体系においてははじめ真理性が主張できる。つまり「ある経験命題の真理性は私たちの連関体系に属しているのである」(83)。この知識の体系は〈信じる〉ことに基礎をおいている。〈信じる〉ことはまた信念の体系に属していることなのである。しかし〈知る〉ことと〈信じる〉ことは、論理的にカテゴリー上区別されるが、〈知る〉ことは〈信じる〉ことなしには成り立ち得ないことをウィトゲンシュタインが強調しているように思われる。

ウィトゲンシュタインの〈私は知っている〉という語の展望は、近代の哲学が取り扱ってきた方法とはまったく異質なのであって、ウィトゲンシュタインにとって知識の問題は、近代の哲学者たちのように、〈内的過程〉とか〈心的状態〉ではなかったし、またあらゆる先入見やイドラを排除し、人間の知性のなかにある普遍的な知を見出す作業でもなかった。彼は知の営みの根拠になっているのを人間の言語的行為にみたのであつた。したがって、この知は共同的であるし、伝承されるものであり、また実践的なものである。彼はこの人間の言語活動を言語ゲームとして把え、その文法的考察に身を委ねたのであつた。この考察に立ち限り、彼の哲学的態度は決して人間の理性とか知性の批判とはならない。彼の基本的な哲学の姿勢は言語批判である。この立場からすれば、近代哲学が求めたような懐疑論的論証の手続きも虚しいし、またその認識論的問題も解消されなければならないのは当然であろう。

引用及び参考文献

この論文作成にあたり、『確実性の問題』(L. Wittgenstein (ed. G. E. M. Anscombe & G. H. von Wright), Über Gewissheit. Basil Blackwell, Oxford, 1979. 黒田亘訳、『ウィトゲンシュタイン全集 9』, 大修館書店, 1975))からの引用はすべて本文にそのパラグラフ・ナンバーのみをつけた。

G. E. M. Anscombe, Collected Philosophical Papers, Volume 1 (From Parmenides to Wittgenstein), Basil Blackwell, Oxford, 1981.

A. J. Ayer, Wittgenstein, Random Haus, New York, 1985.

E. M. Curley, Descartes Against Skeptics, Basil Blackwell, Oxford, 1978.

R. Descartes, Medetationes de prima philosophia (三木清訳『省察』, 岩波文庫), Librairie Philosophique J. Vrin, Paris, 1966.

L. W. Doob, Slightly Beyond Skepticism, Yale Uni. Press, New Haven & London, 1987.

A. Kenny, Wittgenstein (野本和幸訳『ウィトゲンシュタイン』法政大学出版), Harvard Uni. Press, Cambridge, Massachusetts, 1973. N. Malcom, Nothing is Hidden, Basil Blackwell, Oxford, 1986.

N. Malcolm, Thought and Knowledge, Cornell Uni. Press, Ithaca & London, 1977

G. E. Moore, Philosophical Papers, George Allen & Unwin Ltd, London, 1959.

T. Morawetz, Wittgenstein and Knowledge, Uni. of Massachusetts Press, 1978.

P. A. Schlip (ed.), The Philosophy of G. E. Moore, Vol.1,2, Cambridge Uni. Press, London, 1942.

V. A. & S. G. Shanker (ed.), Ludwig Wittgenstein, Critical Assessments, A Wittgenstein Bibliography, Croom Helm, London, 1986.

P. Unger, Ignorance, A Case of Scepticism, Clarendon Press, Oxford, 1975.

G. H. von Wright, Wittgenstein, Basil Blackwell, Oxford, 1982.

E. H. Wolgast, Paradoxes of Knowledge, Cornell Uni. Press, Ithaca & London, 1977.

岡田雅勝,『ウィトゲンシュタイン』, 清水書院, 1986.

岡田雅勝,「確実性の問題」, 旭川医科大学一般教育紀要1号, 1979年.

岡田雅勝,「哲学的文法」, 旭川医科大学一般教育紀要4号, 1982年.

岡田雅勝,「文法的考察と感覚の問題」, 北海道大学哲学会編「哲学」18号, 1982年.

岡田雅勝,「規則—懐疑論の問題」, 旭川医科大学一般教育紀要6号, 1985年.

岡田雅勝,「規則に従うこととブラクシスの問題」, 旭川医科大学一般教育紀要7号, 1986.